

## 第2章 子育て一般に関する意識

ここでは夫婦の出生行動に焦点を当て、子育ての負担感について訊いている。

### 1. 理想の子ども数と現実に予定している子ども数

#### 若年層ほど少ない理想の子ども数

初めに、理想の子ども数について尋ねたところ(問5)、全体では「3人」が44.1%と最も多く、次いで「2人」が42.1%となっており、「2～3人」を理想の子ども数と感じている人は8割強となっている。

これを年齢層別に見てみると、年齢層が上がるにつれて理想の子ども数も多くなっており、20代では理想の子ども数は「2人」が48.9%と最も多く、「3人」は26.5%となっているが、40代では「2人」が42.6%、「3人」が43.7%と「3人」という回答の方が多くなっている。さらに70代では「2人」が35.6%、「3人」が52.2%となっており、半数以上が理想の子ども数を「3人」と回答している(第2-1図)。

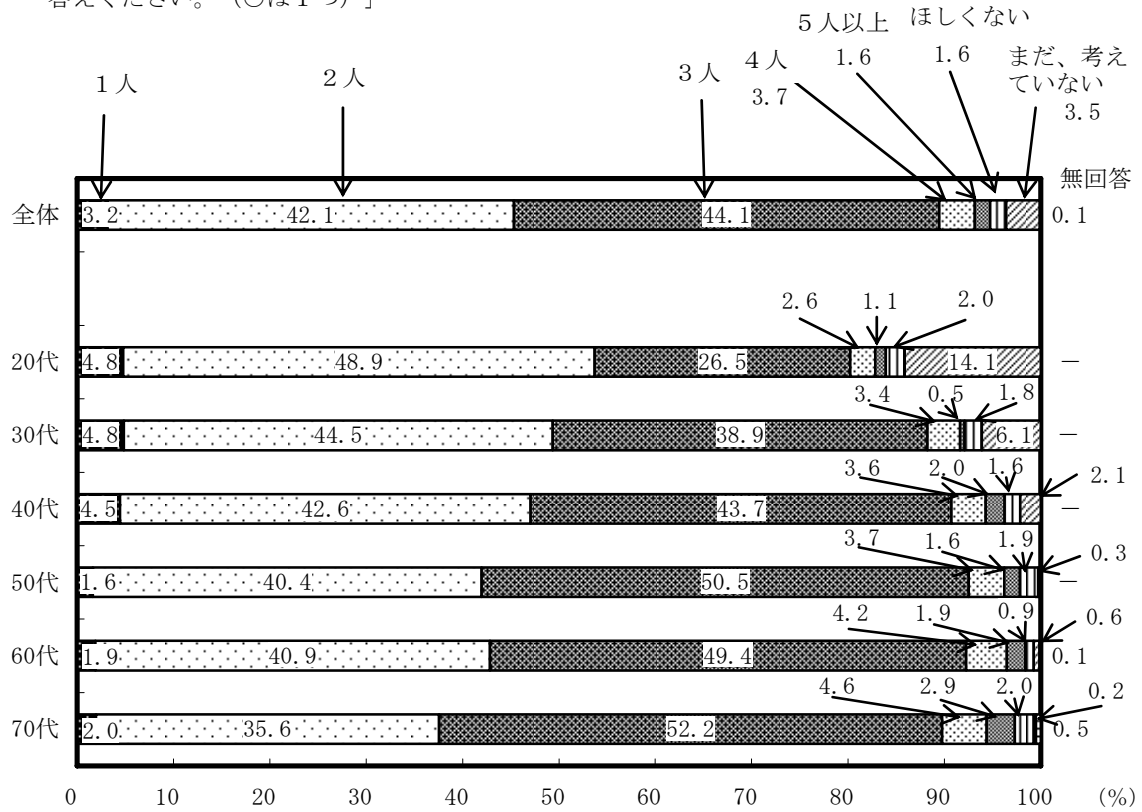
次に理想の子ども数の平均<sup>1</sup>を見ると、全体では2.52人であり、年齢層が上がるにつれて理想の子ども数は増える結果となっている(第2-2図)。92年度に同様の質問をしたときの2.62人と比べて若干低くなっているが、依然として子どもを2人以上持ちたいと考えている人は多い。

---

<sup>1</sup> 5人以上は5人、ほしくないは0人として計算した。

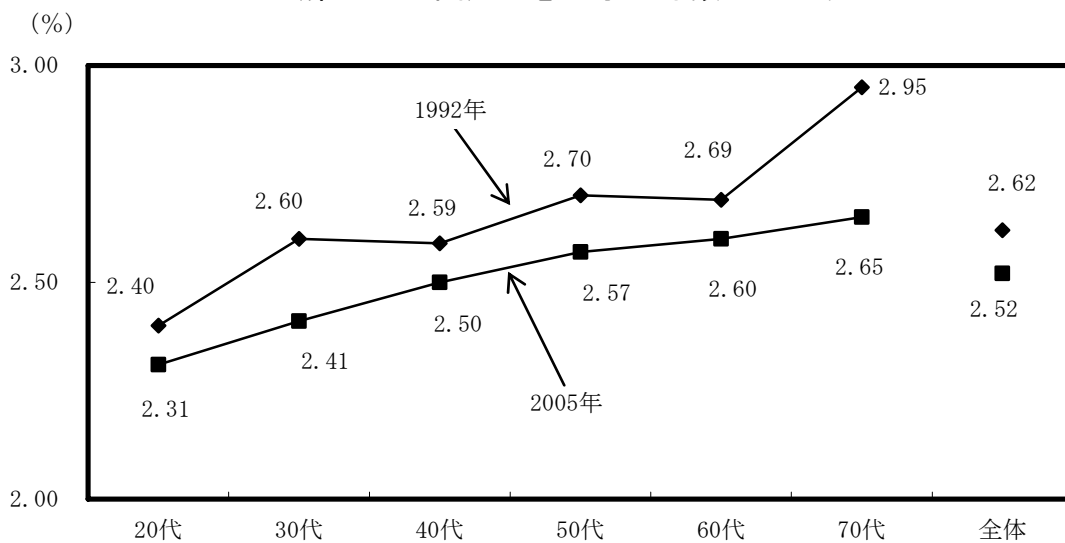
(第2-1図) 若年層ほど少ない理想の子ども数

「あなたは子どもを何人ぐらいほしいですか。あるいはほしかったですか。理想の子ども数をお答えください。(〇は1つ)」



(備考) 回答者は、全国の20~79歳までの男女3,471人。

(第2-2図) 理想の子ども数は2人以上



(備考) 回答者は、全国の20~79歳までの男女3,346人(「まだ、考えていない」、「無回答」を除いて集計)、1992年調査時は2,440人(「まだ、考えていない」、「無回答」を除いて集計)。

予定の子ども数は「2人」が約5割

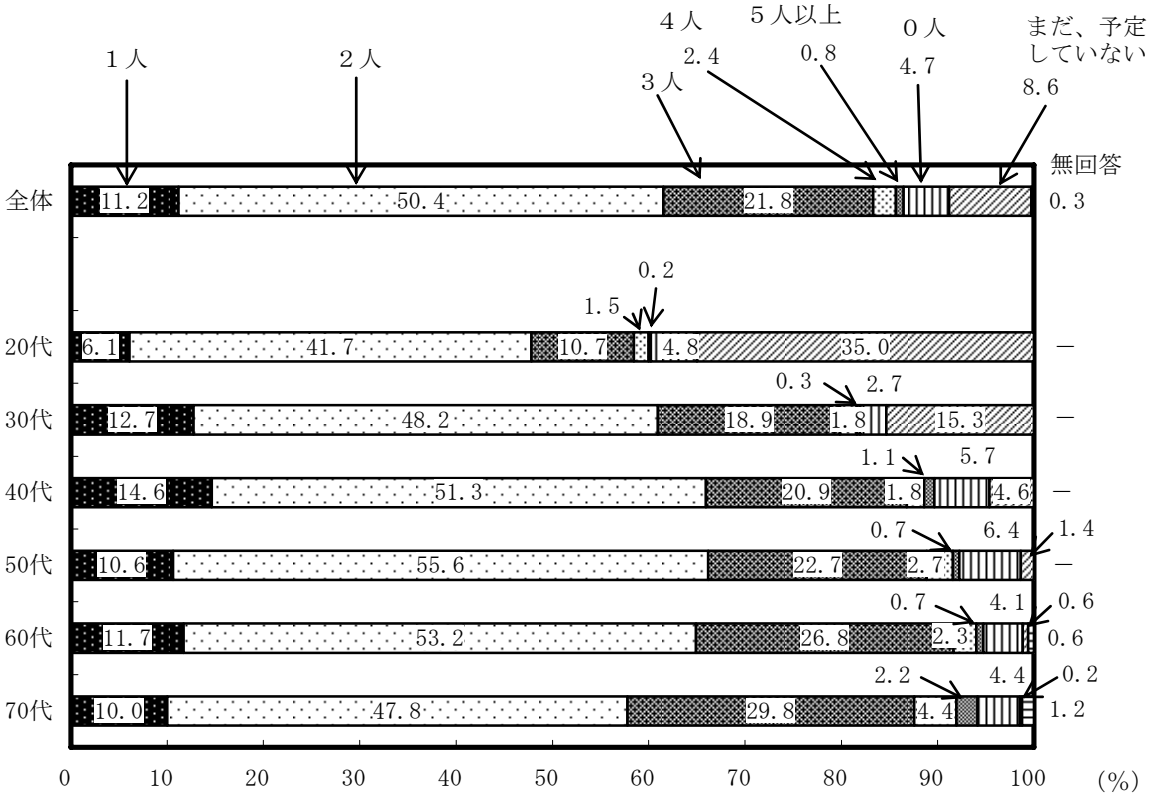
現実に予定している子どもの数（今後子どもを作る予定のない方は現在の子どもの数）を尋ねたところ（問6）、全体では「2人」がほぼ半数を占めており、「3人」は21.8%にとどまっている。

次に年齢層別に見てみると、70代で「3人」以上の回答の割合が36.4%と高くなっている。また、20代では35.0%が「まだ予定していない」となっている（第2-3図）。

また、予定の子ども数の平均<sup>2</sup>を見てみると、全体では2.09人となっており、理想の子ども数と比べて0.4人程度少なくなっている。この乖離幅は92年度においても同程度であり、人々は理想とする子ども数をなかなか現実には持てない状況が続いている。

（第2-3図） 予定の子ども数は「2人」が約5割

「あなたが現実に予定している子どもの数を（今後子どもを作る予定のない方は現在の子どもの数）お答えください。（〇は1つ）」



（備考） 回答者は、全国の20～79歳までの男女3,471人。

<sup>2</sup> 5人以上は5人として計算した。

## 2. 子育ての負担感

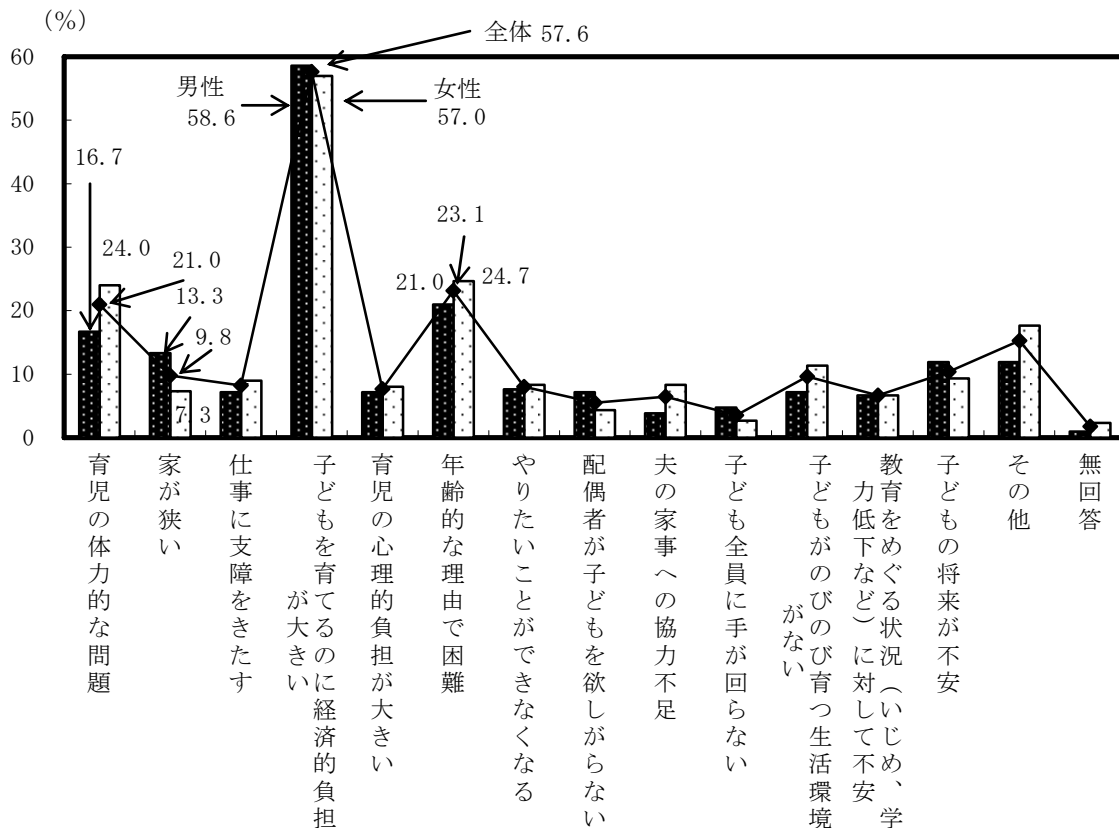
### 子どもの数に影響を与えている大きな経済的負担

理想の子ども数に比べ現実に予定している子ども数が少ない理由を尋ねたところ（問7）<sup>3</sup>、「子どもを育てるのに経済的負担が大きい」と回答した割合が57.6%と最も高くなっている。次に「年齢的な理由で困難」が23.1%、更に「育児の体力的な問題」、「家が狭い」の順となっている（第2-4図）。

男女間で回答に比較的大きな乖離が見られたものとして、「育児の体力的な問題（男性16.7%、女性24.0%）」や「家が狭い（男性13.3%、女性7.3%）」があげられる。

（第2-4図）子どもの数に影響を与えている大きな経済的負担

「理想の子ども数に比べて予定の子ども数が少ない理由について、次の中から当てはまるものをお選びください。（○は3つまで）」



（備考）「問5 あなたは子どもを何人ぐらいほしいですか。あるいはほしかったですか。理想の子ども数をお答えください。（○は1つ）」よりも「問6 あなたが現実に予定している子どもの数を（今後子どもを作る予定のない方は現在の子ども数）お答えください。（○は1つ）」が少ない人が対象の問で、回答者数は全国の20～49歳の男女510人。

<sup>3</sup> 理想の子ども数より予定している子ども数が少ない回答者に訊いている。

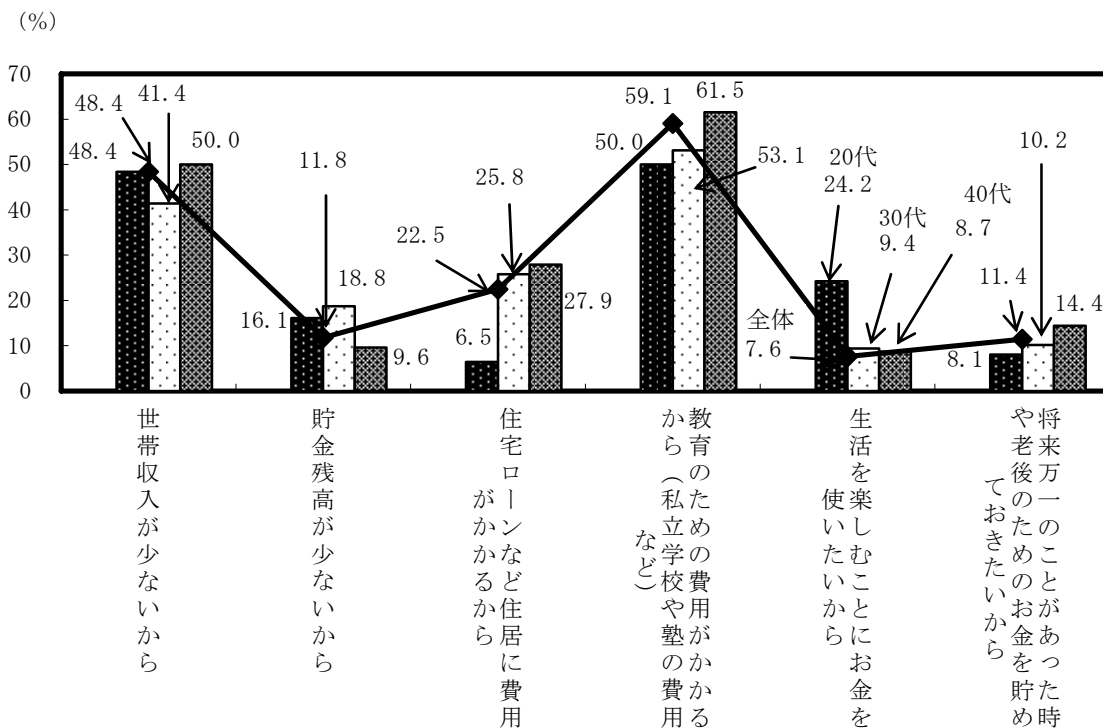
## 子育ての負担を高める「少ない世帯収入」と「教育費用」

子どもを育てるのに経済的負担が大きい理由を尋ねたところ<sup>4</sup>（問7付問）、「教育のための費用がかかるから（私立学校や塾の費用など）」と回答した人の割合が59.1%と最も高くなっている。次いで「世帯収入が少ないから」が48.4%、更に「住宅ローンなど住居に費用がかかるから」、「貯金残高が少ないから」の順となっている（第2-5図）。

次に年齢層別に見ると、「教育のための費用がかかるから」と「住宅ローンなど住居に費用がかかるから」については、年齢層が上がるにつれて、負担に感じる割合が高まっている。

（第2-5図）子育ての負担を高める「少ない世帯収入」と「教育費用」

「そう考える理由について、あなたの考えに一番近いものをお選びください。  
（○は2つまで）」



- （備考） 1. 「問7 理想の子どもの数に比べて予定の子どもの数が少ない理由について、次の中から当てはまるものをお選びください。（○は3つまで）」と尋ねた問に対して「4 子どもを育てるのに経済的負担が大きい」と回答した人を対象に、「そう考える理由について、あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は2つまで）」の問に回答した人の割合。  
2. 回答をした人は全国の15歳以上79歳までの男女552人。

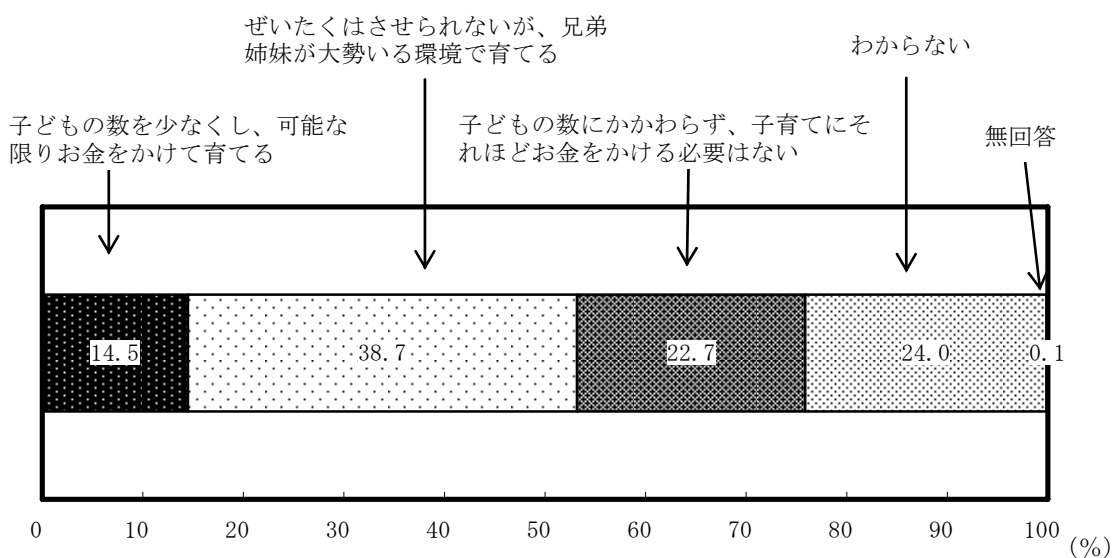
<sup>4</sup> 問7で「4 子どもを育てるのに経済的負担が大きい」を選んだ回答者に訊いている。

「子どもの数を少なくし、可能な限りお金をかけて育てる」と考えている人は少数派

子どもの数と子育てにかかる費用について尋ねたところ（問8）、「ぜいたくはさせられないが、兄弟姉妹が大勢いる環境で育てる」と回答した人の割合が38.7%と最も高くなっている。次いで「わからない」が24.0%、「子どもの数にかかわらず、子育てにそれほどお金をかける必要はない」が22.7%となっている（第2-6図）。なお子どもの数を減らしてでも、一人の子どもに十分なお金をかけて育てたいと考えている人は1割強に留まっている。

（第2-6図）「子どもの数を少なくし、可能な限りお金をかけて育てる」と考えている人は少数派

「子どもの数と子育てにかかる費用の関係について、あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は1つ）」



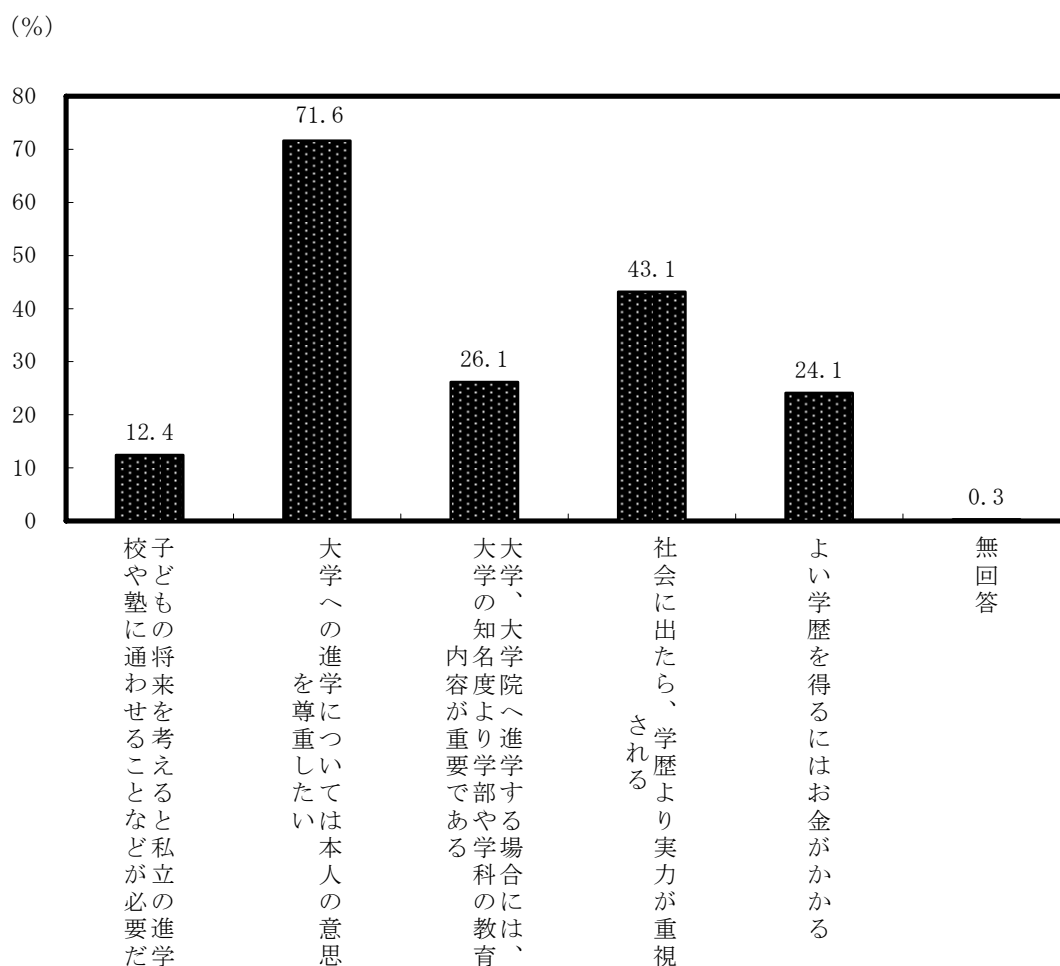
（備考）回答者は、全国の20～49歳までの男女1,641人。

## 大学への進学は本人の意思を尊重

学歴や学び方について尋ねたところ（問9）、「大学への進学については本人の意思を尊重したい」と回答した人の割合が71.6%と最も高く、次いで「社会に出たら、学歴より実力が重視される」が43.1%、「進学する場合は大学の知名度より教育内容が重要である」が26.1%となっている（第2-7図）。

（第2-7図）大学への進学は本人の意思を尊重

「学歴や学び方に関して、あなたはどう考えますか。次の中から当てはまるもの全てをお選びください。（〇はいくつでも）」



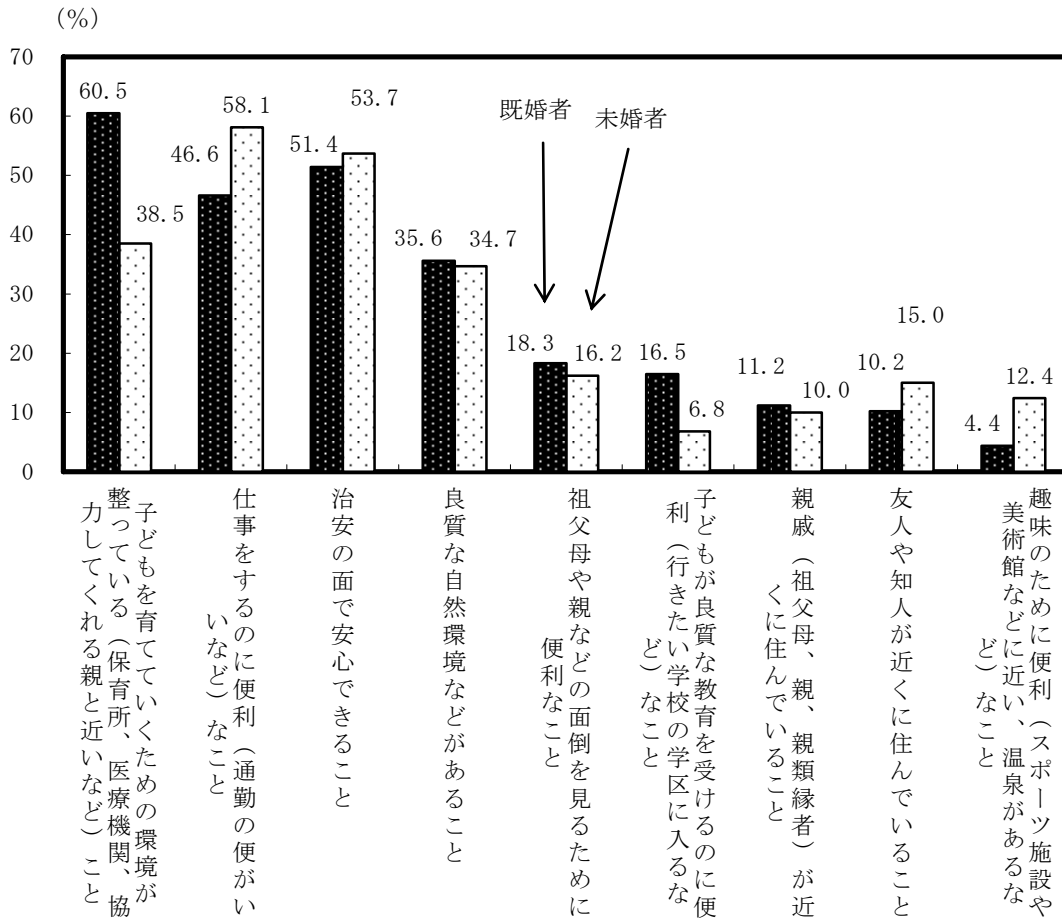
（備考）回答者は、全国の20～49歳までの男女1,641人。

住居を選ぶときに既婚者は「子育て環境」を、未婚者は「仕事の利便性」を重視

住居を選ぶ時に重視するものについて尋ねたところ（問 10）、既婚者は「子育て環境（60.5%）」を重視している人の割合が高いのに対して、未婚者は「仕事の利便性（58.1%）」を重視している人の割合が高い。また両者共に「治安」を重視している人の割合が高くなっている（第2－8図）。

（第2－8図）住居を選ぶときに既婚者は「子育て環境」を、未婚者は「仕事の利便性」を重視

「あなたが住む場所を選ぶとき、より多くの費用を払ってでも重視するものは何ですか。次の中から当てはまるものをお選びください。（○は3つまで）」



（備考）回答者は、全国の20～49歳の男女で有配偶者（配偶者と離死別したものは除く）と未婚者の合計である1,558人。「その他」と「無回答」については省略。

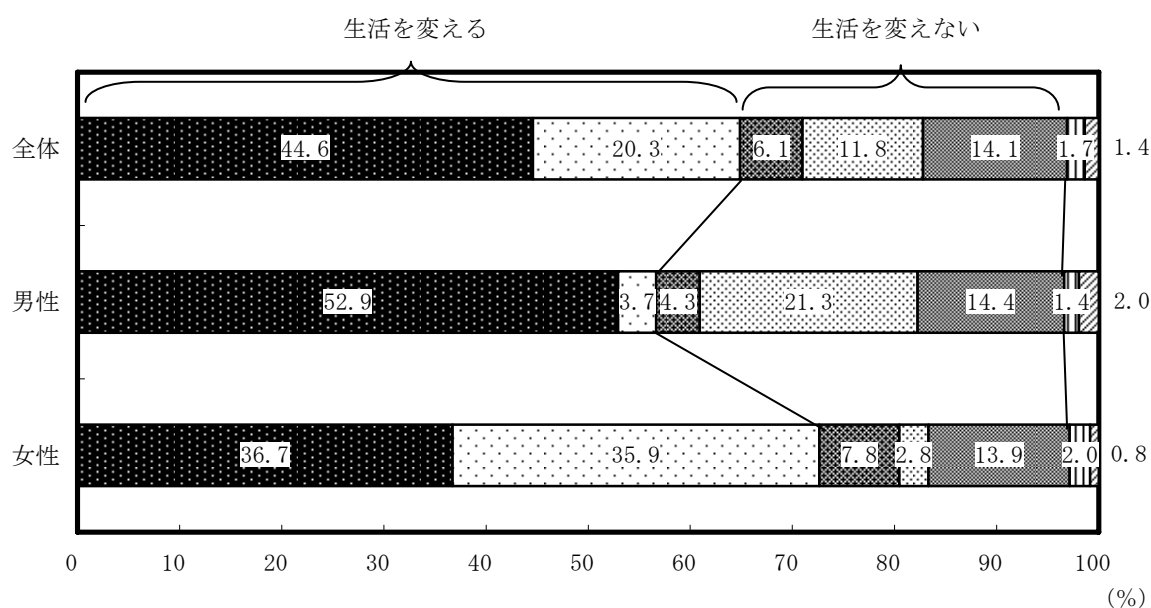
## 育児のために仕事を辞めたり休む女性は3割

子どもの誕生により自分の生活はどのように変化するかを尋ねたところ（問11）、「生活を変える」（「主に余暇の時間を減らすことにより、子育ての時間を作る」と「仕事を辞めたり、休んだりすることなどにより、子育ての時間を作る」の合計）と回答した人の割合は64.9%となっている（第2-9図）。

男女別に見ると、男性の多くは「余暇の時間を減らす」ことにより子育て時間を作ることを考えているが、「仕事を辞めたり休む」人は3.7%と少数派である。また、「配偶者が子育てをするから自分の生活を変える必要がない」と考えている人の割合も21.3%となっている。一方女性では、「仕事を辞めたり休む」と考えている人の割合が3人に1人となっている。

（第2-9図）育児のために仕事を辞めたり休む女性は3割

「もし今新たに子どもが生まれた場合、あなた自身の生活はどのように変化しますか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は1つ）」



- 主に余暇の時間を減らすことにより、子育ての時間を作る
- 主に仕事を辞めたり、休んだりすることなどにより、子育ての時間を作る
- ▣ 有料の子育てサービスを利用することにより、できる限りこれまでの生活を変えない
- ▤ 主に配偶者が子育てをするることにより、できる限りこれまでの生活を変えない
- ▥ 親や親族などに子育てを手伝ってもらうことにより、できる限りこれまでの生活を変えない
- ▧ その他
- ▨ 無回答

（備考）回答者は、全国の20～49歳までの男女1,162人である（「今後子どもを新たに持つつもりはない」と回答した者479人を除いて集計）。

### 第3章 子育てへの支援に関する意識

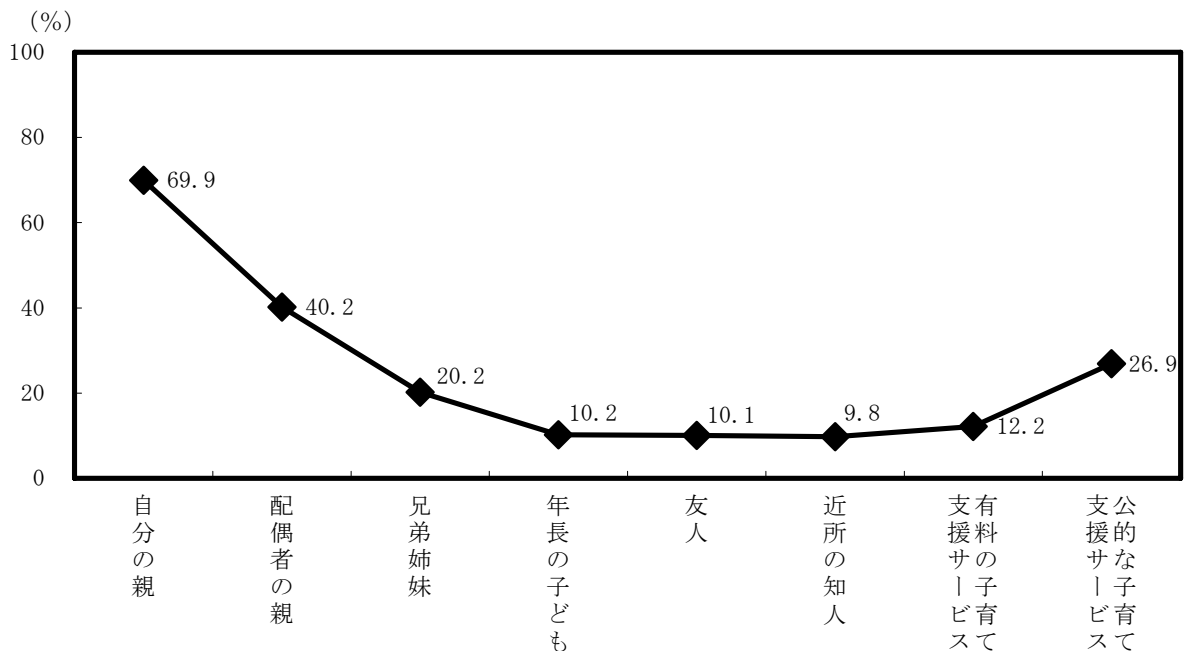
以下では、子育てへの支援についての意識や実際の経験、子どもの経済的面倒をみてもよいと思う期間、祖父母の子育てへの関わりなどについて見る。

#### 夫婦の親以外に子育ての手助けを頼る人は限定的

子育てに手助けが必要な場合、誰を頼るかを尋ねたところ（問12）、「自分の親」と回答した人の割合が69.9%と最も高い。次いで、「配偶者の親」が40.2%となっている。一方で「公的な子育て支援サービス（ファミリーサポートセンターなど）」は26.9%と一定存在するが、その他の選択肢への回答は限定的である。夫婦の親以外に子育ての手助けは頼みにくい状況がうかがえる（第3-1図）。

（第3-1図） 夫婦の親以外に子育ての手助けを頼る人は限定的

「子育てに手助けが必要な場合、あなたは誰を頼りますか。次の中から当てはまるもの全てをお選びください。お子さんがいない場合、もしいたらと仮定してお答えください。（〇はいくつでも）」



（備考）回答者は、全国の15～79歳の男女3,670人。「その他」「無回答」は記載を省略。

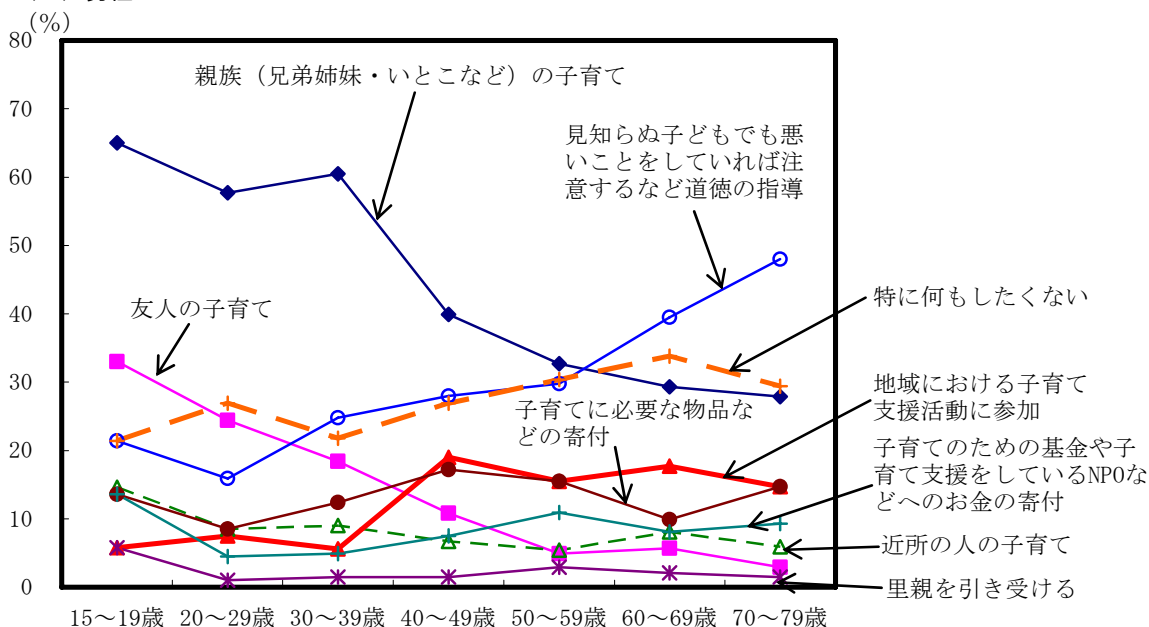
年齢層が高くなるほど見知らぬ子どもへの指導や地域の子育て支援を行っても良いとする人が多い

自分の子どもや孫以外の子育てを手伝ってもよいと考える範囲を尋ねたところ（問 13）、「見知らぬ子どもでも悪いことをしていれば注意するなど道徳の指導」と回答した人の割合が年齢層が高くなるとともに多くなっている。また、「地域における子育て支援活動に参加」は男女ともに 40 代以上で高まる傾向にあり、この年齢層では自分の子育てなどが一息つき、地域の子育て支援等に関心が向かう余裕が生じると思われる（第 3 - 2 図）。

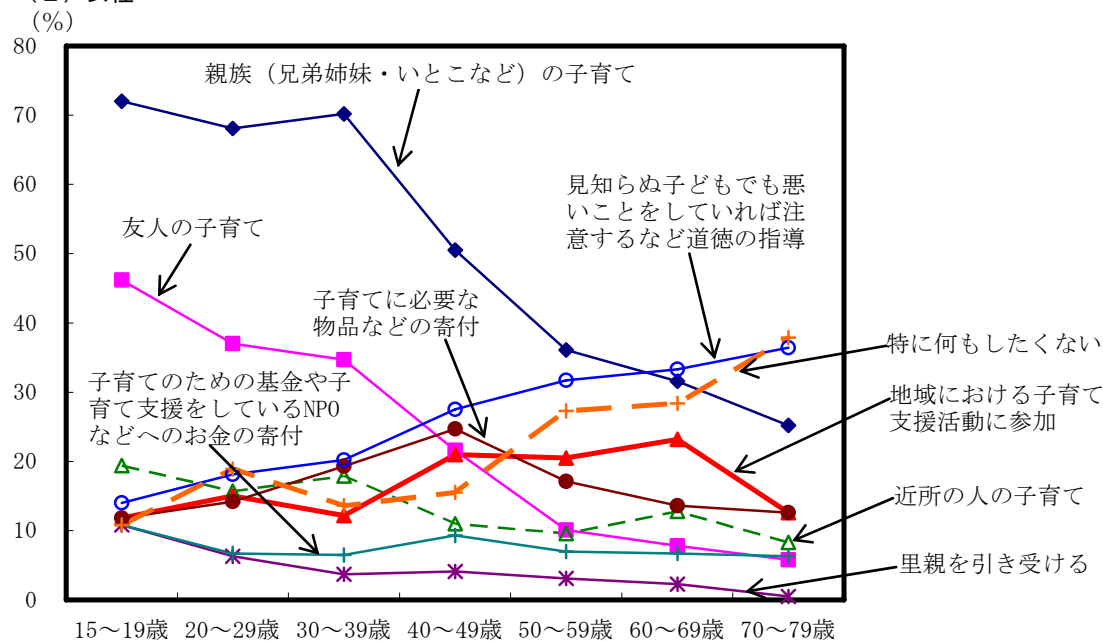
(第3-2図) 年齢層が高くなるほど見知らぬ子どもへの指導や地域の子育て支援を行っても良いとする人が多い

「自分の子どもや孫以外で子育てを手伝ってもよいと思うものがありますか。当てはまるものを全てお選びください。(〇はいくつでも)」

(1) 男性



(2) 女性



(備考) 回答者は、全国の15~79歳の男性1,725人、女性1,926人（無回答を除く）。「その他」は記載を省略。

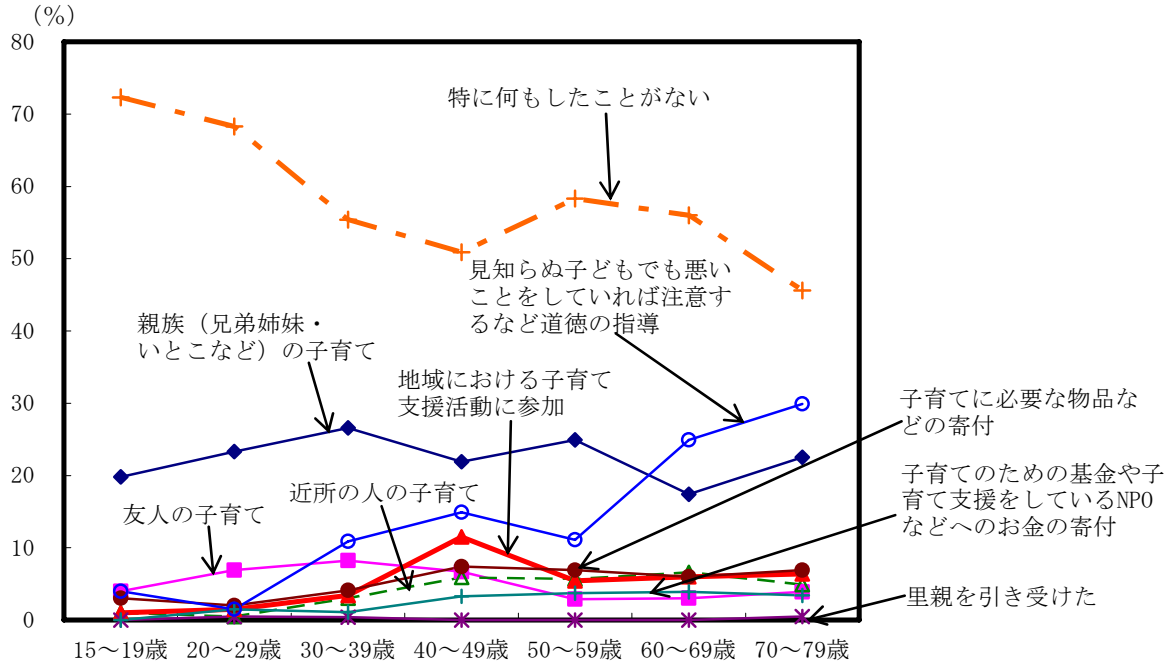
## 自分の子どもや孫以外の子育てを手伝った経験は少ない

実際に自分の子どもや孫以外の子育てを手伝った経験について尋ねたところ（問 14）、各年齢層において「特に何もしたことがない」と回答した人の割合が高い。「親族（兄弟姉妹・いとこなど）の子育て」と回答した人は男性で2割、女性で3割程度いるほか、女性の30代で「友人の子育て」の経験が高くなっているのが特徴的である（第3－3図）。

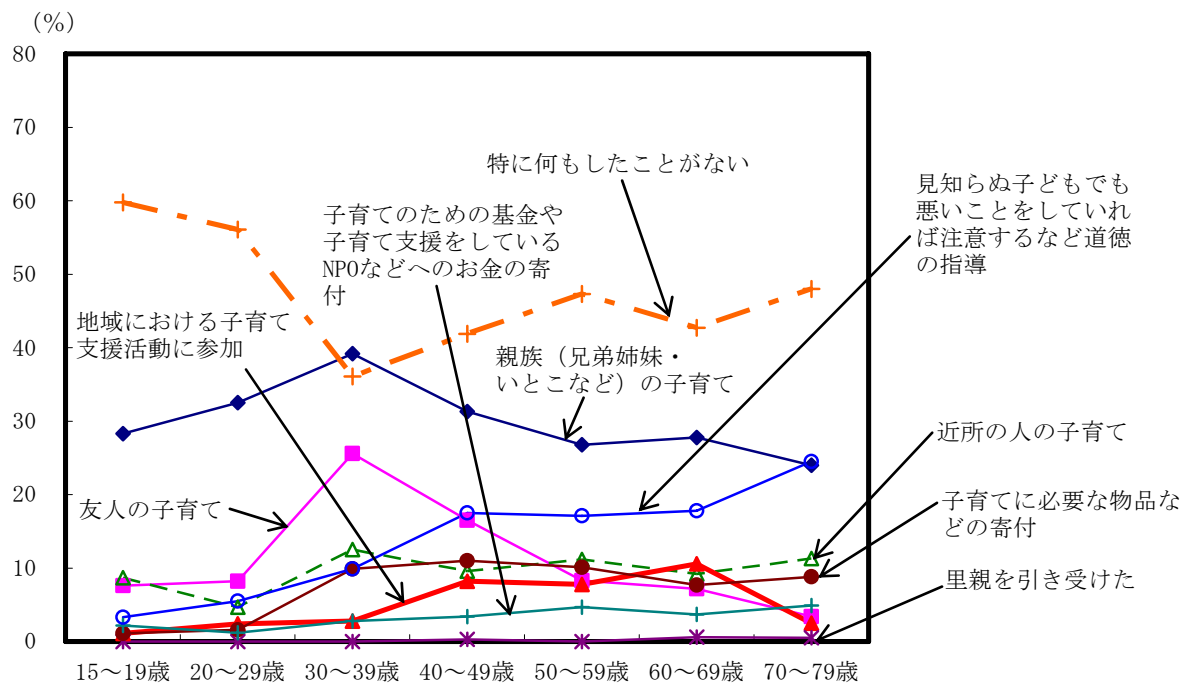
### (第3-3図) 自分の子どもや孫以外の子育てを手伝った経験は少ない

「自分の子どもや孫以外の子育てをあなたは手伝ったことがありますか。当てはまるものを全てお選びください。(〇はいくつでも)」

#### (1) 男性



#### (2) 女性



(備考) 回答者は、全国の15歳~79歳の男性1,727人、女性1,928人(無回答を除く)。「その他」は記載を省略。

自分の子どもや孫以外の子育てを手伝った経験がない理由について「責任がもてないから」と回答した人の割合は 50 代以上で高い

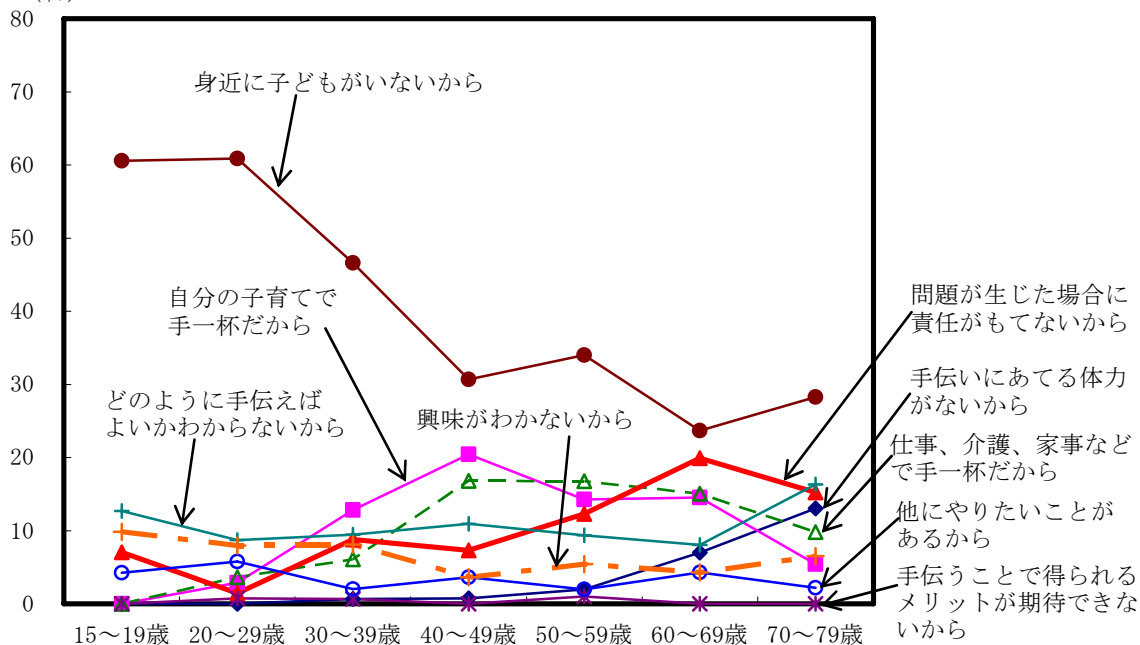
実際に自分の子どもや孫以外の子育てを手伝った経験がない理由を尋ねたところ（問 14 付問）、「身近に子どもがいないから」と回答した人の割合が高い。一方で、女性の 30 代では、「自分の子育てで手一杯だから」と回答した人の割合が 38.9%と最も高くなっている。

「問題が生じた場合に責任がもてないから」との回答も 50 代以上で高くなっており、役割や責任の明確化が課題の一つであることを示唆している（第 3 - 4 図）。

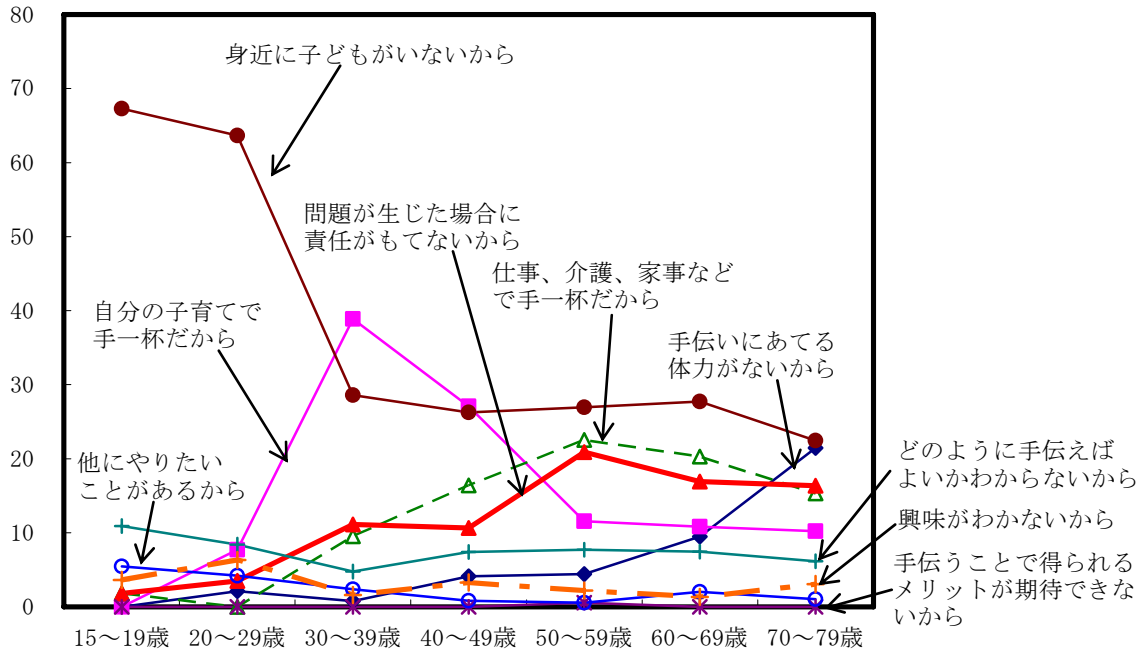
(第3-4図) 自分子どもや孫以外の子育てを手伝った経験がない理由について「責任がもてないから」と回答した人の割合は50代以上で高い

「その理由は何ですか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。  
(○は1つ)」

(1) 男性  
(%)



(2) 女性  
(%)



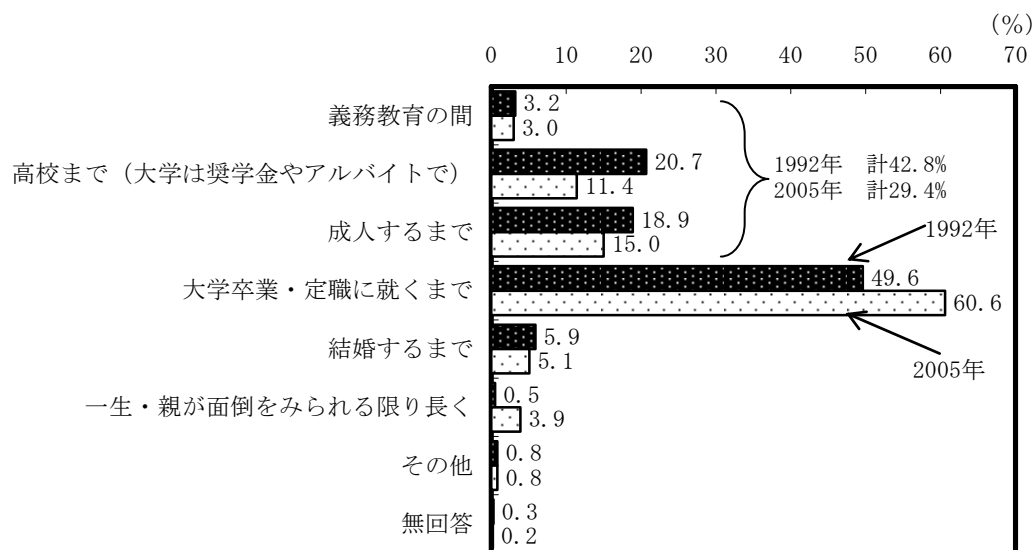
- (備考) 1. 「問14 自分子どもや孫以外の子育てをあなたは手伝ったことがありますか。当てはまるものを全てお選びください。(○はいくつでも)」と尋ねた問に対して「特に何もしたことがない」と回答した人に対する割合。  
2. 回答者は、全国の15~79歳の男性975人、女性874人(無回答を除く)。「その他」は記載を省略。

親が子どもに対して経済的な面倒をみてもよいと考える期間は長期化している

親は子どもをどのくらいの期間経済的に面倒をみてもよいと思うかを尋ねたところ（問 15）、「義務教育の間」、「高校まで」、「成人するまで」と回答した人の割合は 29.4%である。これは、1992 年の 42.8%と比較すると 13.4%ポイント減少している。一方で、「大学卒業・定職に就くまで」及び「親が面倒をみられる限り長く」と回答した人の割合は増加しており、一般に親が子どもに対して経済的な面倒をみてもよいと思う期間は長期化している（第 3－5 図）。

（第 3－5 図） 親が子どもに対して経済的な面倒をみてもよいと考える期間は長期化している

「親は子どもがどの程度になるまで経済的に面倒をみてもよいと思いますか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は1つ）」



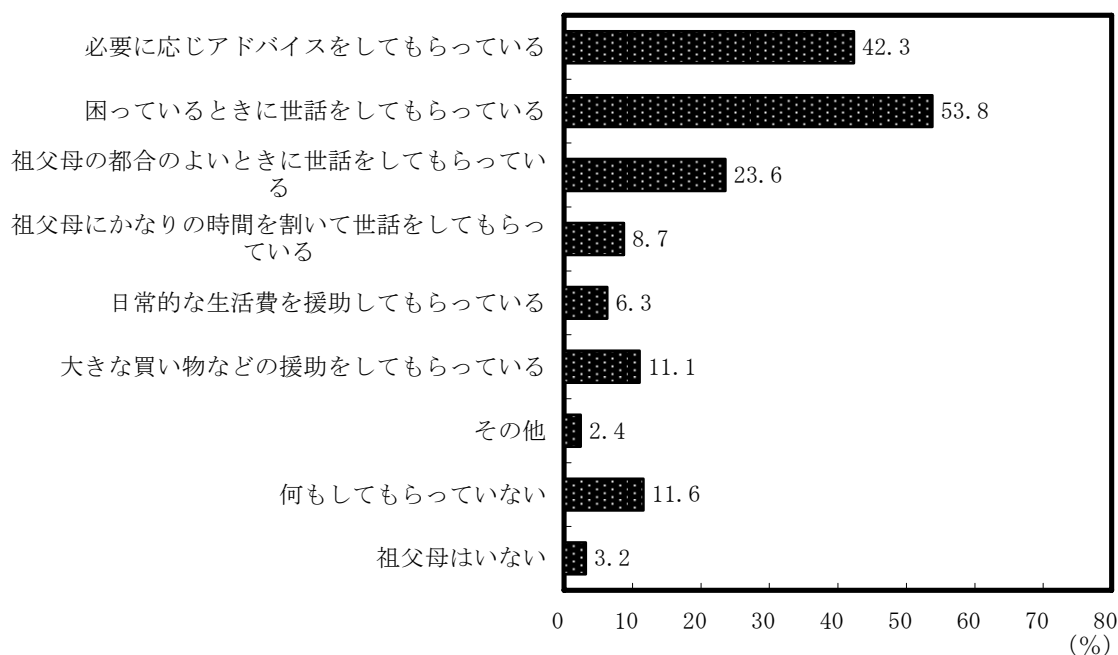
- (備考) 1. 回答者は、1992年は全国の20歳以上の男女2,440人、2005年は全国の15～79歳の男女3,670人。
2. 「大学卒業・定職に就くまで」は、1992年は「学生の間（大学卒業までは面倒をみる）」と回答した人の割合。2005年は、「学生の間（大学卒業までは面倒をみる）」と回答した人の割合に「定職に就くまで」と回答した人の割合を加えたもの。1992年には「定職に就くまで」という選択肢が設けられていない。2005年では「学生の間」と回答した人が45.2%、「定職に就くまで」と回答した人が15.4%。
3. 「一生・親が面倒をみられる限り長く」は、1992年は「一生」と回答した人の割合。2005年は「親が面倒をみられる限り長く」と回答した人の割合。

祖父母の子育てへの関わりについて「困っているときに世話をしてもらっている」と回答した人が5割以上

祖父母が子育てにどのように関わっているかを尋ねたところ（問16）、「困っているときに世話をしてもらっている」と回答した人の割合が53.8%となっている。続いて、「必要に応じアドバイスをしてもらっている」が42.3%となっている。一方で、「何もしてもらっていない」と回答した人の割合は11.6%にとどまっている（第3-6図）。

（第3-6図） 祖父母の子育てへの関わりについて「困っているときに世話をしてもらっている」と回答した人が5割以上

「あなたのご家庭では子育てに（子どもの）祖父母がどのようにかかわっていますか。当てはまるものを全てお選びください。（〇はいくつでも）」



（備考）回答者（中学生までの子どもがいる人）は、全国の15～79歳の男女950人。  
「無回答」は記載を省略。

## 第4章 遺産相続に関する意識

子育ての経済的な負担が強く認識されているが、子育て世代への大きな経済的移転である遺産相続についてはどう考えられているのだろうか。ここでは、遺産・生前贈与、親の老後などについての意識を見る。

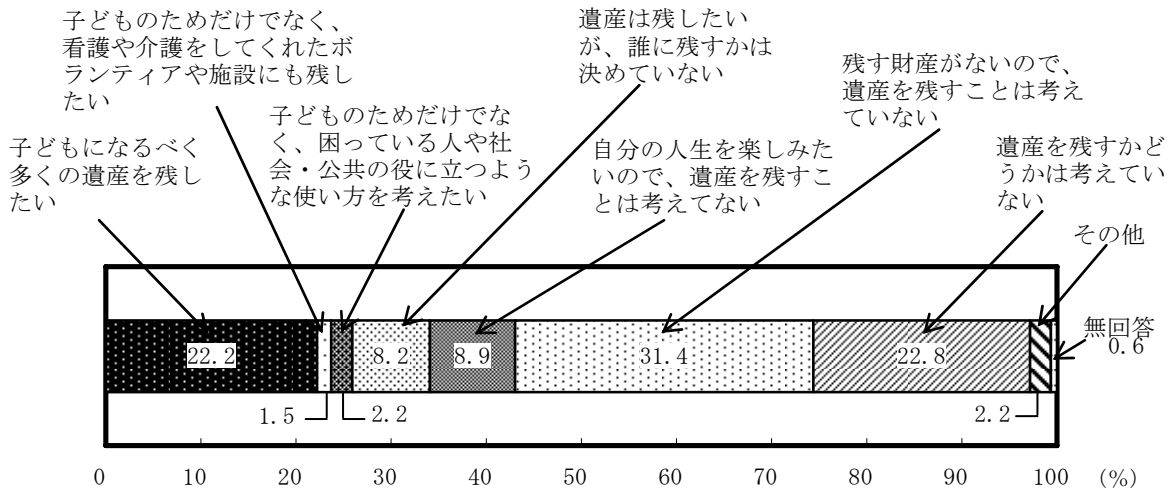
遺産を残すことに否定的な人の割合は1割未満
-----------------------

子どもへ遺産を残すことに対する考え方を尋ねたところ（問17）、「残す財産がないので、遺産を残すことは考えていない」と回答した人の割合が31.4%と最も高く、次いで「遺産を残すかどうかは考えていない」が22.8%となっている。

遺産を残すことに対して肯定的な考え方（「子どもになるべく多くの遺産を残したい」、「子どものためだけでなく、看護や介護をしてくれたボランティアや施設にも残したい」、「子どものためだけでなく、困っている人や社会・公共の役に立つような使い方を考えたい」、「遺産は残したいが、誰に残すかは決めていない」の合計）は34.1%である。一方で、遺産を残すことに否定的な考え方（自分の人生を楽しみたいので、遺産を残すことは考えていない）は8.9%となっている。何れにしても後に続く世代へ何らかの資産を残したいという遺産動機は強いと考えられる（第4-1図）。

(第4-1図) 遺産を残すことに否定的な人の割合は1割未満

「あなたは、将来、子どもなどに遺産を残すことについて、どのようにお考えですか。次の中から、あなたの考えに近いものをお選びください。ただし、配偶者は除いて考えてください。(〇は1つ)」



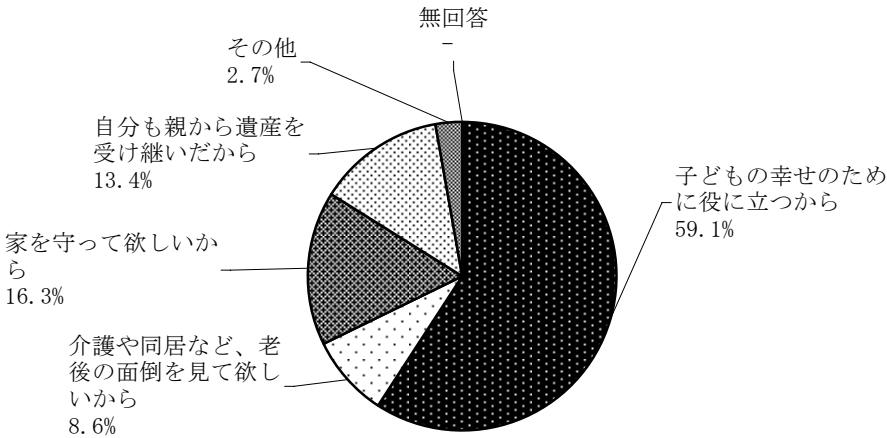
(備考) 回答者は全国の15~79歳の男女3,670人。

子どもに多くの遺産を残したい理由は子どもの幸せのために役立つから

子どもに多くの遺産を残したい理由を尋ねたところ（問 17 付問）、「子どもの幸せのために役に立つから」と回答した人の割合が 59.1%と最も高い。次いで、「家を守って欲しいから」16.3%、「自分も親から遺産を受け継いだから」13.4%といった「家」を意識した回答の割合が高い。一方で、「介護や同居など、老後の面倒を見て欲しいから」といった見返りを求める考え方は 8.6%となっている。（第 4 - 2 図）。

（第 4 - 2 図） 子どもに多くの遺産を残したい理由は子どもの幸せのために役立つから

「その理由は何ですか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は1つ）」



（備考） 1. 「問17 あなたは、将来、子どもなどに遺産を残すことについて、どのようにお考えですか。次の中から、あなたの考えに近いものをお選びください。ただし、配偶者は除いて考えてください。（○は1つ）」と尋ねた問いに対して「子どもになるべく多くの遺産を残したい」と回答した人に対する割合。  
2. 回答者は全国の15～79歳の男女3,670人のうち816人。

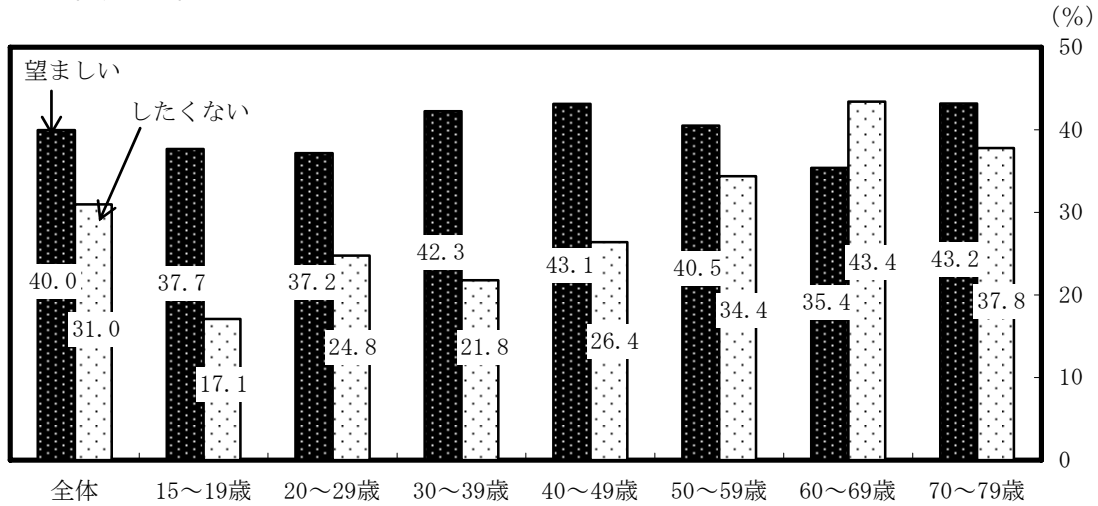
子どもへの財産の生前贈与に対する考え方は「望ましい」と回答した人の割合が4割であり、「したくない」の3割を上回る

子どもへの財産の生前贈与についての考え方を尋ねたところ(問 18)、「望ましい」(「子どもが必要としているときに支援できるので、望ましい」と「生きているうちに感謝されるので、望ましい」の合計)との回答した人の割合は40.0%であり、「したくない」(「生きているうちに自分がどれくらい使うか分からないので、するつもりはない」と「先に贈与してしまうと、老後の面倒を見てもらえるかどうか分からないので、したくない」と「なんとなく抵抗感がある」の合計)の31.0%に比べ多くなっている。中でも「子どもが必要としているときに支援できるので望ましい」との回答した人の割合が高くなっている。年齢層別に見ると、60代は「望ましい」より「したくない」と回答した人の割合が多くなっており、今後の自分自身の生活とのかね合いからためらいがあると考えられる(第4-3図)。

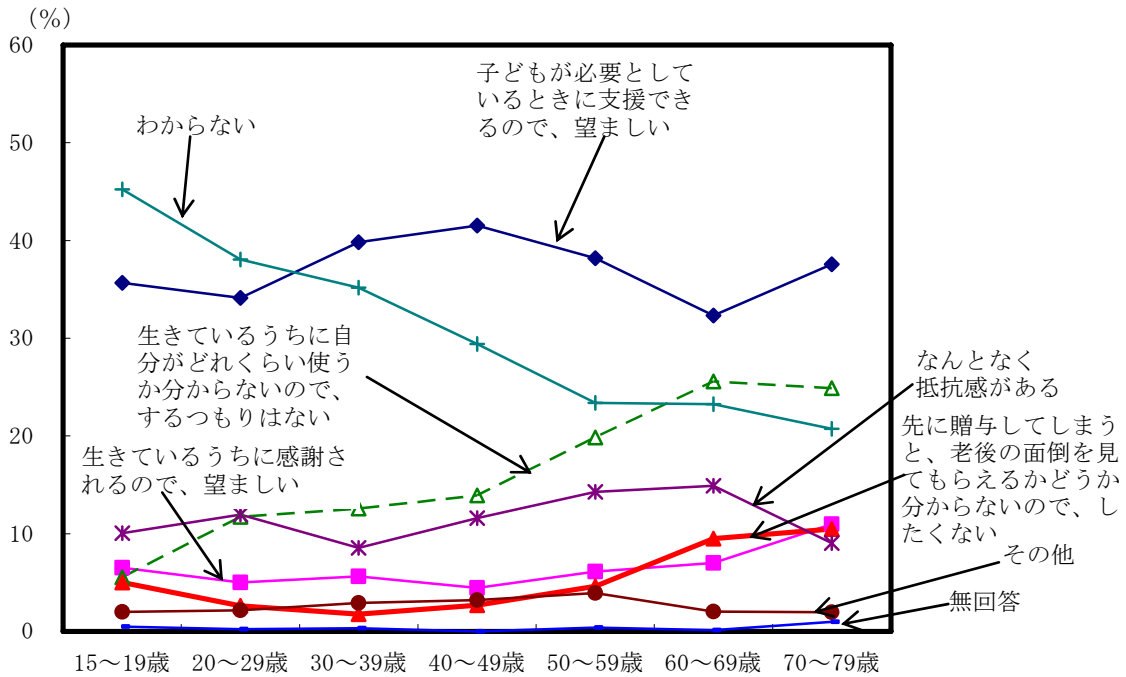
(第4-3図) 子どもへの財産の生前贈与に対する考え方は「望ましい」と回答した人の割合が4割であり、「したくない」の3割を上回る

「財産（の一部）を子どもに生前贈与することについてどう思いますか。あなたの考えに当てはまるものを全てお選びください。（○はいくつでも）」

(1) 全体、年齢層別



(2) 年齢層別（選択肢）



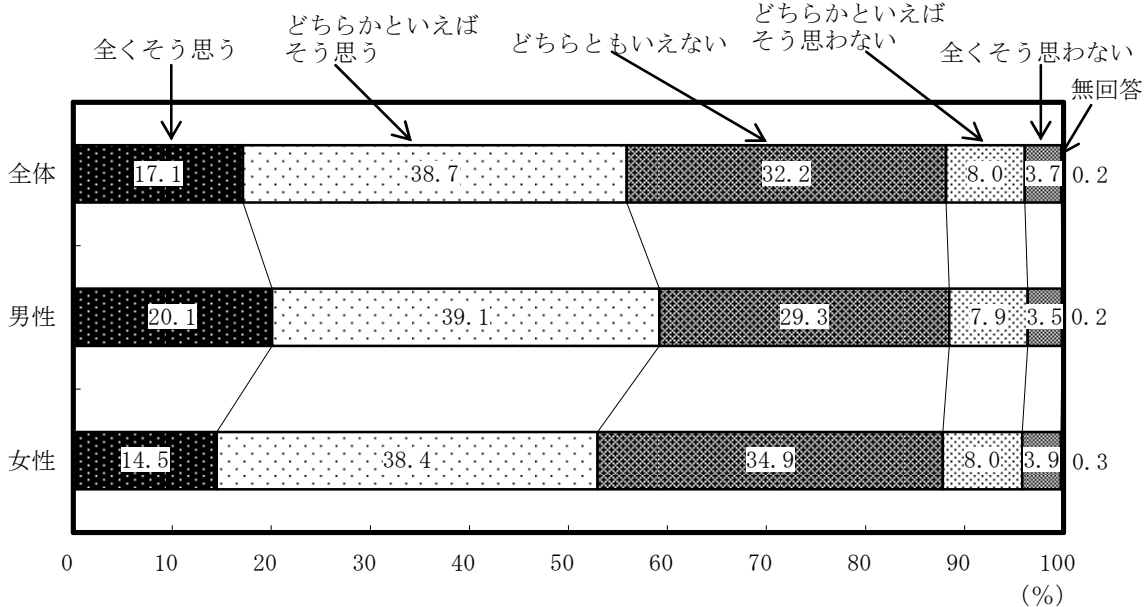
(備考) 回答者は全国の15~79歳の男女3,670人。

子どもは親の老後の面倒を見るべきと考える人の割合は5割以上

子どもは親の老後の面倒を見るべきと考えるかを尋ねたところ(問19)、「そう思う」(「全くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計)と回答した人の割合は55.9%となっている。男女別に見ると、男性は「そう思う」と回答した人の割合が59.2%、女性は52.9%となっており、男女にやや考え方の差が見られる(第4-4図)。

(第4-4図) 子どもは親の老後の面倒を見るべきと考える人の割合は5割以上

「子どもは親の老後の面倒を見るべきだと思いますか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。(〇は1つ)」



(備考) 回答者は、全国の15~79歳の男女3,670人。

## 第5章 現在の社会状況に関する意識

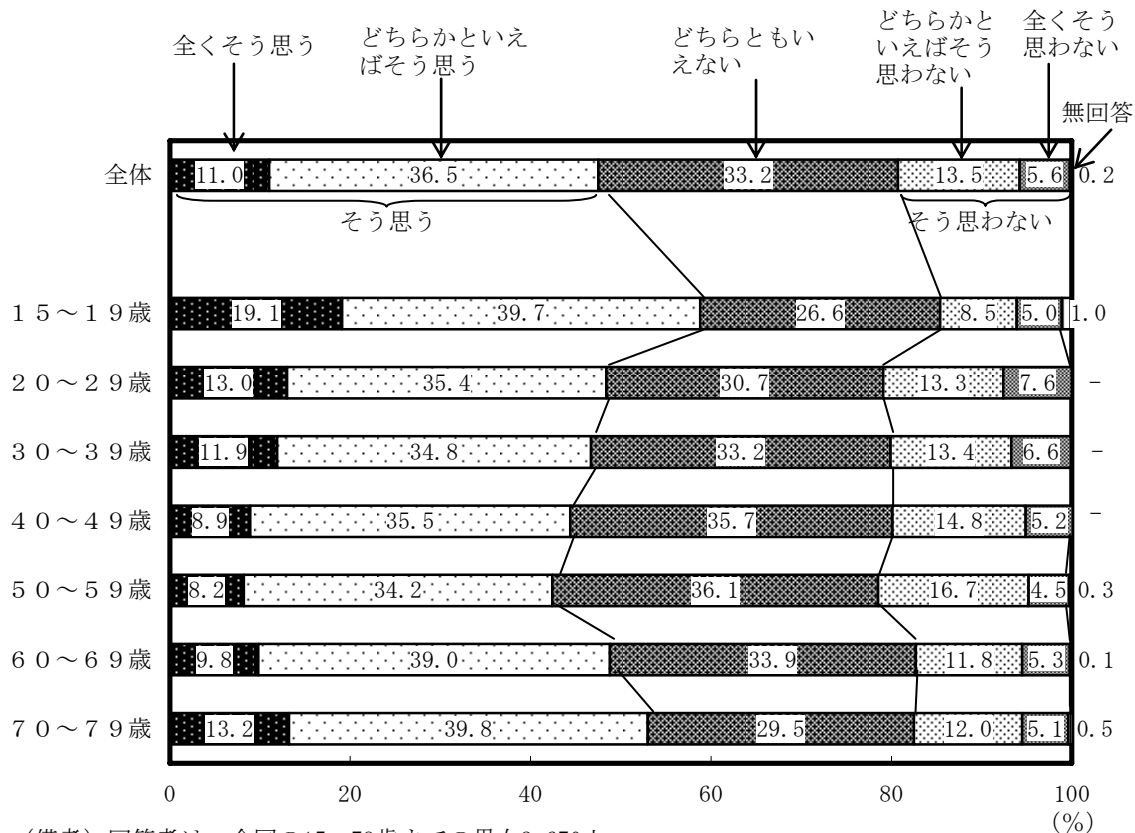
近年、フリーターの増加などを背景に、次世代育成を担うべき世代の間で不安が増大している。ここでは、社会の状況に対する意識についてみる。

「自分たちの世代が経済的に恵まれている」と考えている人の割合は、50代で少ない

自分たちの世代は、他の世代に比べて経済的に恵まれているかについて尋ねたところ（問20）、「そう思う」（「全くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）と回答した人の割合は、年代別にみて概ね4割から6割となっているが、いわゆる団塊の世代を含む50代では42.4%と、他の世代よりも経済的に恵まれていると考える人が少なくなっている（第5-1図）。

（第5-1図） 「自分たちの世代は経済的に恵まれている」と考えている人の割合は、50代で少ない

「自分たちの世代は他の世代に比べて経済的に恵まれていると思いますか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は1つ）」

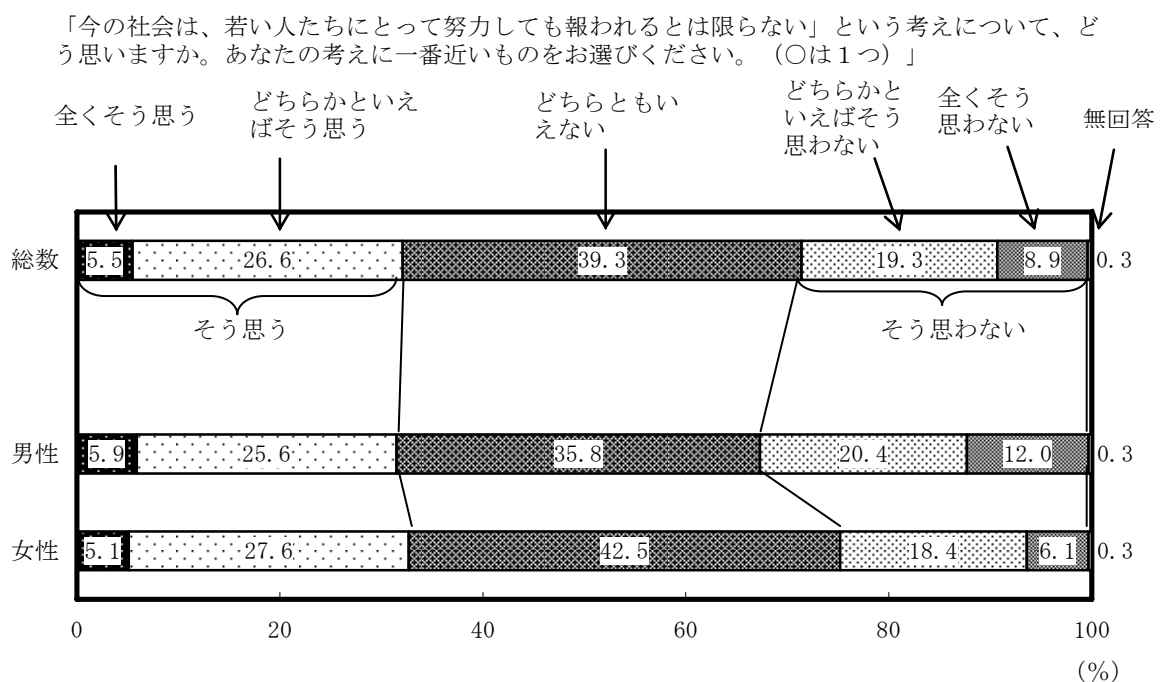


「若い人たちにとって努力すれば報われる」と考える人の割合は、男性の方が多い

「今の社会は、若い人たちにとって努力しても報われるとは限らない」という考えについてどう思うか尋ねたところ（問21）、「どちらともいえない」と回答した人の割合が39.3%、続いて「そう思う」（「全くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）の32.1%、「そう思わない」（「全くそう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計）の28.2%となっている。

男女別にみると、「そう思う」と回答した人の割合には大きな差はないが、「そう思わない」と回答した人の割合は、男性が32.4%であるのに対して女性は24.5%と少なく、男性の方が努力すれば報われると考える人が多い（第5-2図）。

（第5-2図）「若い人たちにとって努力すれば報われる」と考える人の割合は、男性の方が多い

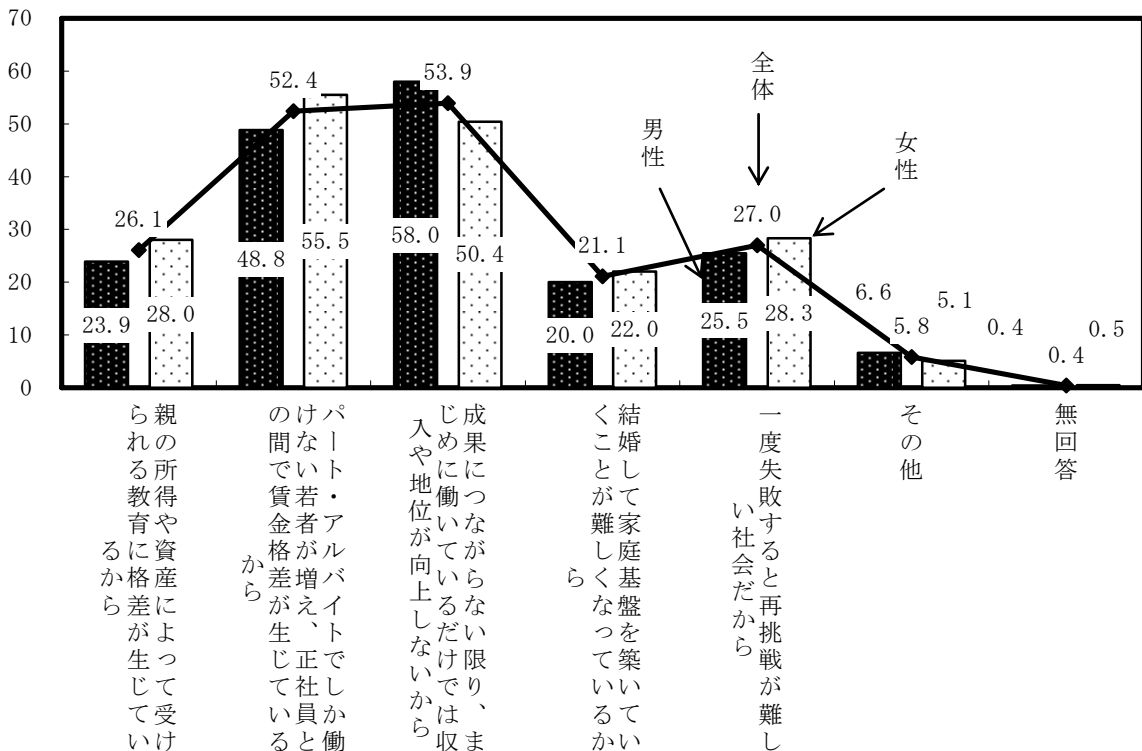


努力しても報われない理由は、「まじめに働いているだけでは収入や地位が向上しない」ことや「パート・アルバイトでしか働けない若者が増えたから」を挙げている人が全体の5割

問21の「今の社会は、若い人たちにとって努力しても報われるとは限らない」という問いに「そう思う」（「全くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）と回答した人に、その理由について尋ねたところ（問21付問）、「成果につながる限り、まじめに働いているだけでは収入や地位が向上しないから」と回答した人の割合が53.9%、「パート・アルバイトでしか働けない若者が増え、正社員との間で賃金格差が生じているから」と回答した人の割合が52.4%と多くなっている（第5-3図）。

（第5-3図）努力しても報われない理由は、「まじめに働いているだけでは収入や地位が向上しない」ことや「パート・アルバイトでしか働けない若者が増えたから」を挙げている人が全体の5割

(%) 「そう考える理由は何ですか。あなたの考えに当てはまるものを全てお選びください。（○はいくつでも）」



(備考) 「問21「今の社会は、若い人たちにとって努力しても報われるとは限らない」という考えについて、どう思いますか。あなたの考えに一番近いものをお選びください。（○は1つ）」との問いに対して、「1 全くそう思う」、「2 どちらかというところそう思う」と回答した人が対象の間で、回答者数は全国の15歳～79歳の男女1,178人。